災害復旧事業によせて

# 「能登半島地震」
# 感謝の気持ちを込めて復興へ

石川県輪島市長
梶　文秋

## １．はじめに

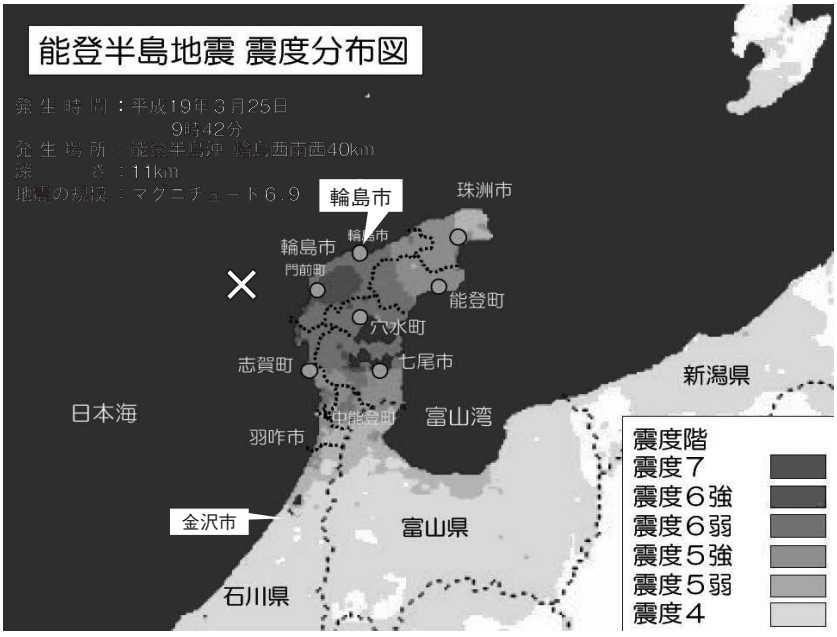
突然襲った震度６強の能登半島地震に際し、全国各地から心温まる御支援、御協力いただきましたことを心から深く感謝を申し上げます。

輪島市は、日本海に突き出した能登半島の先端「行き止まりのまち」といった表現がいかにも似合う位置にあります。人口約３万４千人、面積が426㎢、山地が約80％と、平地が極めて少ない市です。

地元の人たちの間で物々交換から始まった朝市は、今ではすっかり輪島の名物でおよそ360mに居並ぶ露店の数は約250軒。新鮮な魚介類はもちろん、地元の野菜も名物のひとつです。観光シーズンにはたくさんの人で賑わう盛況ぶりです。また、輪島塗が全国的に有名であり、漆器を英語で“japan”『ジャパン』と表記されるように、輪島塗は日本を代表する工芸品だと、業界とともに自負しています。平成15年７月７日に能登空港が開港し、羽田・能登を約１時間で１日２往復定期便が運行されております。

## ２．能登半島地震

平成19年３月25日、日曜日、天気も良く穏やかな朝でした。突然に大地が揺れ、かすかな地鳴りから一気に突き上げる衝撃と南北の大きな揺れ。経験のない強さ、時間が長い、さらに強くなる、立っていることが出来ない状況でした。戸棚の上からテレビが飛んで、冷蔵庫の扉が開き中の物が流れるように落ちてきます。書架が倒れ本がバサバサ、壁に掛けた額が音を立てて踊っている、す




震度分布図

倒壊家屋①

倒壊家屋②

倒壊家屋③

倒壊家屋④

ごい揺れ、大変な事態が起きました。時間は午前９時42分、床に飛び散った物の合間を抜けるように歩き、防災服を身につけあわてて外に飛び出し、車に乗り込みました。前方の道路では倒れた家屋やブロック塀が散乱している状況が見えます。市役所に向かうため、進路を変えたが別の通りでも何棟もの倒壊家屋があり、そこをすり抜けて行くという凄惨な状況でありました。

震源地は、昨年２月に合併したばかりの輪島市門前町沖合。マグニチュード6.9、震度は６強。門前町では合併した年の10月に、大きな地震とそれに伴う津波が発生したとの想定で防災訓練を1,300名規模で行ったばかりでした。

しかし、多数の倒壊家屋と高齢化率47.6％（旧門前町住民基本台帳ベース）は、「動ける」・『働ける人』がたりないという、訓練との大きな違いを見せつけ、対策の大変さを痛感いたしました。

その一方で、今回の地震で被害が集中し、当市においても特に高齢化率が深刻な門前町道下地区では、民生委員と独自の福祉推進委員でつくる「地域見守りネットワーク」が組織されており、寝たきり高齢者宅や独居者宅を住宅地図で色分けした「要介護者マップ」を利用し、安否の確認を迅速に行っていただきました。今、全国の民生委員の視察が相次いでおります。阪神淡路の震災でも、プロの緊急援助隊による救出より、地域住民により、助け出された方が多かったと聞いております。

行政と住民の連携だけでなく、地域住民の連携「日頃の近所付き合い」が重要であると再認識いたしました。

### ３．今回の地震の特徴

全壊家屋513戸、大規模半壊・半壊住家を併せて1,086戸、一部損壊7,726戸。

非住家の全壊・半壊・一部損壊の合計が7,691戸（平成19年10月２日現在）。

この被害の多さの中で、倒壊家屋の下敷きになった方、行方不明になった方がいなかったのは、7

月16日に発生した新潟中越沖地震と比較しても奇跡としか言いようがございません。また、火災と津波が発生しなかったことも奇跡的でありました。

しかし、2,221人が約１カ月の避難生活を余儀なくされました。

地震発生後、国道や県道などの主な道路における通行止めは18箇所で発生し、鉄道、空港も運休・閉鎖されました。今回の地震の被害の大きさを象徴するとも言うべき、県都・金沢と直結する能登有料道路の被害は甚大でありました。能登の先端部で８箇所も寸断され、援助隊の皆さんには、迂回する国道などを使い、苦労の末駆けつけていただきました。また、医療体制が不足している奥能登にとっては命を繋ぐ道であります。避難所から緊急に患者を第３次医療機関まで搬送するにも相当時間がかかりました。

一方、高規格道路である能越自動車道「穴水道路」はほとんど被害もなく、翌26日早朝には復旧が完了するなど、規格の高い道路の早期整備の必要性を痛感しました。

震源地に近い深見地区では、唯一の生活道路が大規模な崩壊により寸断され、孤立した状態となりました。船で避難するのは怖いという方々は、写真のような危険箇所を徒歩で避難する究極の選択をしました。

車一台がやっと通れるような狭さでも、道路が通っているということは、いざという時に市民は安心できるし、安心が災害発生時に市民の行動に大きく影響を与えます。

能登有料道路

船で避難（深見地区）

避難（深見地区）

被災直後（深見地区）

自宅へ帰る（深見地区）

工事状況

12月11日現在

4．おわりに

深見地区の市道復旧工事につきましては、国土交通省より職員や専門家の派遣をいただき、早期復旧に向けた技術的なアドバイスはもとより、危険箇所の作業用として無人化バックホーを貸与いただきました。

これらの御支援により、発災日より1カ月後の4月30日には仮設道路が完成し、被災した自宅の応急修理などのための日中の帰宅が可能となりました。そして、発災日以降、深見地区全世帯に夜間帰宅制限をお願いしておりましたが11月25日をもって解除いたしました。年内にはこの工区のすべての工事を完了する予定であります。

今回の地震では、行政と住民の連携だけではなく、地域住民の連携が重要ということを教えてくれました。

まだまだ、復旧・復興に向けて努力をしている途中でありますが、経験しなければわからない情報などもあると思いますので、機会あるごとに発言させていただきたいと考えております。

最後に、国土交通省をはじめこの紙面では書ききれないほど多くの自治体の皆様やボランティアの方々からいただきました御支援・御協力に対し幾重にも御礼申し上げ、現地からの報告とさせていただきます。

## 防災課だより

〔河川局関係人事発令〕

△平成19年11月27日

派遣（インドネシア共和国）

（河川計画課付）　日下部隆昭

## 人事異動

△平成19年11月30日

辞　職

（独）水資源機構経営企画部審議役

（大臣官房付・東北地方整備局

北上川下流河川事務所長）　三石　真也